

くものいと No.26

KU MO NO I TO

1999 July 13

関西クモ研究会

大阪府茨木市

くものいと26号目次

(兵庫県特集)

山本一幸：但馬地方の真正クモ類—新たに追加される種について	1
清水裕行：トリノフンダマシとカトウツケオグモ	6
船曳和代：姫路科学館で「クモ展」開催	9
須賀瑛文：クモ展見学ドライブ紀行	9
緒方清人：素晴らしきクモ展	12
八幡明彦：クモ展を訪れた仲間たち	14
吉田 真：ヒトエグモ (<i>Plator nipponicus</i>) についての覚え書き	17
会費納入のお願い&編集後記	23

但馬地方の真正クモ類
— 新たに追加される種について —
山本一幸

はじめに

兵庫県北部、但馬地方の真正クモ類については、1990年にそれ以前に発表された文献などをまとめた目録が報告されており（本庄，山本，1990）、37科319種が記録されている。その後、追加報告（山本，1992）や、新たな知見を加えたまとめ（本庄，1994）が発表され、37科340種の真正クモ類が明かとなっている。しかし、近年の日本のクモ学の盛況により、分類体系の変更や新種の発表が相次ぎ、但馬地方の記録についても見直しをする必要性が求められている。さらに、以前は未調査だった朝来郡や養父郡などの南但馬の地域のクモ相の解明も、近年になって少しずつ進められており、新たな知見が得られている。

今回は時間の都合により過去の記録を見直すまでには至らなかったが、近年の調査で、新たに但馬産真正クモ類のリストに追加された種について述べてみる。

謝辞

日頃から貴重な情報の提供や助言をいただいている稲津和之氏、本庄四郎氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

追加種のリスト

但馬産真正クモ類として次の種を新たに加える。なお、採集データは個体数、採集日、場所の順で記しており、採集者はすべて筆者である。

(1) ヒメグモ科 Theridiidae

1, クロササヒメグモ *Thymoites okuma* (YOSHIDA)

吉田（1988）がミジングモ属 *Dipoena* として新種記載したが、後に本種をタイプとしたササグモ属 *Thymoites* が新設された（吉田，1995）。九州の福岡と本州では青森、宮城、山形、長野の各県が産地。今回、兵庫県が新たに加わる。小型のクモで、雄の頭部先端は得意な形態をしており、雌とは色彩が異なる。

採集データ：1♂, 14-Apr.-1997, 城崎郡竹野町今後谷。 1♂, 27-Jun.-1998, 養父郡大屋町明延。 2♀, 27-Jun.-1998, 養父郡大屋町古屋。

2, ヤマトカブトヒメグモ *Pholcomma Japonicum* YOSHIDA

千国 (1989) によれば、分布は本州のおもに亜高山帯とあり、今回、兵庫県で初めての記録となる。

採集データ：1♀, 27-Jun.-1998, 養父郡大屋町米原。

3, ハラナガヒシガタグモ *Episinus mirabilis* (BOES. et STR.)

採集データ：1♂, 24-May-1998, 養父郡大屋町山路。

4, コガネヒメグモ *Chryso venusta* (YAGINUMA)

腹部が黄金色をした大型のヒメグモであるが、採集されることは稀である。クマザサの葉裏で子グモを保護する行動が観察されている。

採取データ：1♀, 11-Aug.-1991, 朝来郡生野町長野。

(2) コガネグモ科 *Araneidae*

5, マルツメオニグモ *Araneus semilunaris* (KARSCH)

採取データ：1♀, 27-Jun.-1998, 養父郡大屋町米原。

6, マルゴミグモ *Cyclosa vallata* KEYSERLING

九州や四国、本州の南部に広く分布するが、但馬地方では今までに採集記録がなかった。近年、海岸部の調査によって確認されており、今年(1999)になって、稲津(私信)により朝来郡和田山町でも確認されている。円網に点々とゴミを丸めて付け、クモ自身もゴミの一つになっている。外敵が近付くと、小刻みに体を振り動かして網を振動する行動が観察されている。

採取データ：1♀, 20-Aug-1998, 美方郡浜坂町久谷。 1♀, 27-Aug-1998, 美方郡浜坂町居組。

(3) ナミハグモ科 *Cybaeidae*

7, ノジマコガタナミハグモ *Cybaeus nojima* IHARA

採取データ：2♀, 24-Nov.-1997, 城崎郡竹野町今後谷。 1♀, 29-Nov.-1998, 養父郡大屋町加保坂。

8, イナバナミハグモ *Cybaeus tottoriensis* IHARA

採取データ：1♂, 3♀, 29-Nov.-1998, 養父郡大屋町夏梅, 由良。

小型のナミハグモ属 *Cybaeus* は形態が類似しており、生殖器の特徴を比較してみなければ種の同定は困難である。さらに、地域的な変異や固有種がみられるなどの理由から、いままでに分類が保留されたままになっていたものも少なくない。近年になって井原(1993, 1994)によって中国地方のナミハグモ属の記載が相次ぎ、ノジマコガタおよびイナバの2種もそれに含まれるものであ

るが、以前から但馬地方においても種名のないまま採集されている。

(3)ホウシグモ科 *Zodariidae*

9,ドウシグモ *Doosia japonica* (BOES. et STR.)

南方系のクモであり、本州、九州、四国、南西諸島（八木沼, 1986）に分布している。但馬地方では海岸部の照葉樹林帯で見つかる。冬期に樹木の樹皮下で成体で多数越冬しているが、夏場はほとんど採集されない。

採集データ：1♂,7♀,16-Dec.-1998,城崎郡竹野町今後谷。

(4)フクログモ科 *Clubionidae*

10,イナフクログモ *Clubiona inaensis* HAYASHI

和名は信州の伊那地方に由来しており、分布は本州の中部地方とある（千国,1989）。しかし、但馬地方には広く分布しており、筆者が同定依頼を受けた、環境アセスメント会社が採集した朝来郡生野町の銀山湖周辺の標本の中にも本種が認められた。

採集データ：1♂,2♀,14-Jun.-1997,2♀,20-Jul.-1997,城崎郡竹野町今後谷。

1♀,27-Jun.-1998,養父郡大屋町明延。

11,ミチノクフクログモ *Clubiona diversa* OP.-CAMBRIDGE

分布は本州の東北地方となっている（千国,1989）が、兵庫県で初めて記録される。フクログモ属 *Clubiona* においては小型の種類であり、ススキなどからなる草地に生息する。

採集データ：1♀,14-Jun.-1997,城崎郡竹野町今後谷。

12,キレオビウラシマグモ *Phrurolithusc coreanus* PAIK

韓国で記載され、池田（1991）によって日本新記録として発表された。しかし、それ以前から採集記録があり、但馬地方に広く分布する。転石や枯れ草の下などを徘徊する姿が見られ、雄の触肢には、先端が二股になった特徴的な突起がある。

採集データ：1♂,29-May-1977,美方郡浜坂町久斗山, 1♂,2♀,14-Jun-1997,城崎郡竹野町今後谷。 1♂,1♀,24-May-1998,養父郡大屋町加保坂。 2♀,27-Jun-1998,養父郡大屋町明延。

(5)カニグモ科 *Thomisidae*

13,チクニエビスグモ *Synaema chikunii* ONO

北方系のクモで、Ono（1983）による記載産地は長野県と北海道になっている。しかし、但馬地方では他に朝来郡生野町の銀山湖周辺で採集されており、

南部の山地に広く分布していることがうかがえる。

採集データ：4♀,27-Jin.-1998,養父郡大屋町古屋。 2♀,25-Jul.-1998,養父郡大屋町横行溪谷, 氷ノ山山麓。 2♂,3-Oct.-1998,養父郡大屋町筏。

14,クマダハナグモ *Misumenops kumadai* ONO

近年、海岸部の調査により生息が確認された。成熟期は春から夏にかけてであり、秋に採集される個体は全て未成熟であった。

採集データ：3♂,6♀,13-Sep.-1997,1♂,24-Nov-1997,城崎郡竹野町今後谷。 1♂,29-Apr.-1999,豊岡市玄武洞。

15,マツモトオチバカニグモ *Oxyotila natsumotoi* ONO

以前から採集されていたが、名前は不明のままだった。但馬地方では広く分布しており、林床の落葉の中より見つかる。

採取データ：1♀,7-Jul.-1977,美方郡浜坂町久斗山。 1♀,13-Sep.-1997,城崎郡竹野町今後谷。 1♀,27-Jun.-1998, 養父郡大屋町古屋。

おわりに

5科 15種を但馬地方の真正クモ類のリストに加える。結果として、1科 15種が加算されることになる。本庄(1994)以後に、シッチコモリグモ *Hygrolycosa umidicola* とミナミコモリグモ *Pirata meridionalis* の2種が追加されており(山本,1998)、累計すると38科357種となる。

今回の記録は、今まで未調査だった地域が調べられたことによって発見された種や、未記載種として同定されないまま保留になっていた種が、後年、記載されたことによって種名が明らかになったものがほとんどである。

今まで未調査だった地域のクモを調べることにより、新たな発見や新知見が得られることは喜ばしい。しかし、既存の種の分布や生息状況の変化をとらえていくことも重要である。生息している環境を巧みに利用して生活しているクモは、自然環境の変化にとっても敏感な生物である。但馬地方の自然環境も、近年、とても早いサイクルで変化している。種類数のカウントを増やしていくことも必要であるが、これからは自然環境を評価する使者としてクモを見ていくことも大切であると痛感している。

参考文献

池田博明,1991. 日本新記録のウラシマグモ属1種と雄の初めての記録.

Atypus,(98/99):17-20.

井原 庸,1993. 中国地方産小型ナミハグモ (クモ目:ナミハグモ科) の5新種.

Acta arachnol.,42(2):115-127.

井原 庸,1994.中国地方産ナミハグモ (クモ目:ナミハグモ科) の2新種.

Acta arachnol.,43(1):87-93.

千国安之輔,1989. 写真日本産クモ類大図鑑. 偕成社, 東京.

本庄四郎,1994. 但馬地方の真正クモ類相について.兵庫生物 10(5)175-178.

本庄四郎、山本一幸,1990. 但馬のクモ類目録. *Iratsume*,(13/14):1-33.

八木沼健夫,1986.原色日本クモ類図鑑.保育社, 大阪.

山本一幸.1992. 但馬のクモ類目録, 追加報告(1). *Iratsume*,(15/16):27-31.

山本一幸,1998. 但馬のクモ類2件. *Iratsume*,(22):35-37.

吉田 哉,1988.日本産ミジングモ属 (真正クモ目:ヒメグモ科) の2新種. *Acta arachnol.*,36:25-31.

吉田 哉,1995.日本産のヒメグモ科 *Thymoites* 属の3種. *Acta arachnol.*,44(2):113-116.

Ono H.,1983 Eine neue Japanische *Synaema*-art (Araneae:Tomisidae) *Acta arachnol.*,31(2):59-63.

Ono H.,1988. A revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida, Araniae) of Japan. National Science Museum,Tokyo.

竹野町,1997. 竹野町委託今後谷生物相基礎調査報告書.

トリノフンダマシとカトウツケオグモ

清水 裕行

「清水さん、トリノフンダマシを採ってきましたよ」と1995年のある日、神戸市在住の陸貝研究家大崎晃さんが標本をもってきて下さった。管瓶の中にはクモが3頭入っていた。1頭は紛れもなくオオトリノフンダマシで1頭はササグモであった。最後の1頭は何やら小さいカニグモ類であった。「未成熟の個体だと同定がやっかいだな」と思いながらピンキュラで覗くと何とイボイボの腹部。亜生体ではあったが、小野展嗣氏(1988)のカトウツケオグモの♂の図(p.29)とピッタリ一致する。私自身はまだ採ったことがない珍蛛である。採集地は宝塚市の旧福知山線跡で、最近ハイキングコースとして人気の出ている場所である。ここは1982年に当時小学生だった四ノ宮靖大・万里兄妹が♀2頭を採集した長尾山に近い。兵庫県内では7頭目になると思う。

大崎氏とはお互いの採集に協力する仲である。私も陸貝を何個体か差し上げたが、今のところ私の輸入超過になる。大崎氏は特にトリノフンダマシに惹かれて注意していたとの事であった。その後、大崎氏はカトウツケオグモの♀まで採集された。場所は神戸市の丹生山で、「葉っぱの上にあまりに堂々としていたので普通種に思えて採ろうかどうか迷ってしまった」との事である。確かに歩脚の白い部分は粉を吹いた白壁の感触で、葛の葉上でよく見かけるゾウムシの一種を連想させ、この昆虫同様一般的なクモと思わせてしまう。危ないところであった。その後も大崎氏は“本命”のトリノフンダマシを提供して下さった。以下に大崎氏から提供された標本のデータを列記して氏に感謝の意を表したい。また、参考までに、兵庫県内のカトウツケオグモの記録と清水が県内で採集したトリノフンダマシのデータも紹介する。

[大崎氏採集のクモ]

1. カトウツケオグモ

1♂s, 1995.6.25, 宝塚市切畑. 1♀a, 1996.7.25, 神戸市丹生山.

2. オオトリノフンダマシ

1♀a, 1995.5.13, 神戸市太山寺. 1♀y, 1996.7.15, 神戸市清水ヶ谷.

1♀y, 1996.7.25, 神戸市長坂山.

3. トリノフンダマシ

1♀s, 1996.7.25, 神戸市長坂山, 摂津地域初.

4. ササグモ

1♂a, 1995.6.25, 宝塚市切畑.

[清水採集のトリノフンダマシ]

1. オオトリノフンダマシ

1♀a, 1♀s, 1980.8.8, 西宮市北山公園, 摂津地域初.

2. シロオビトリノフンダマシ

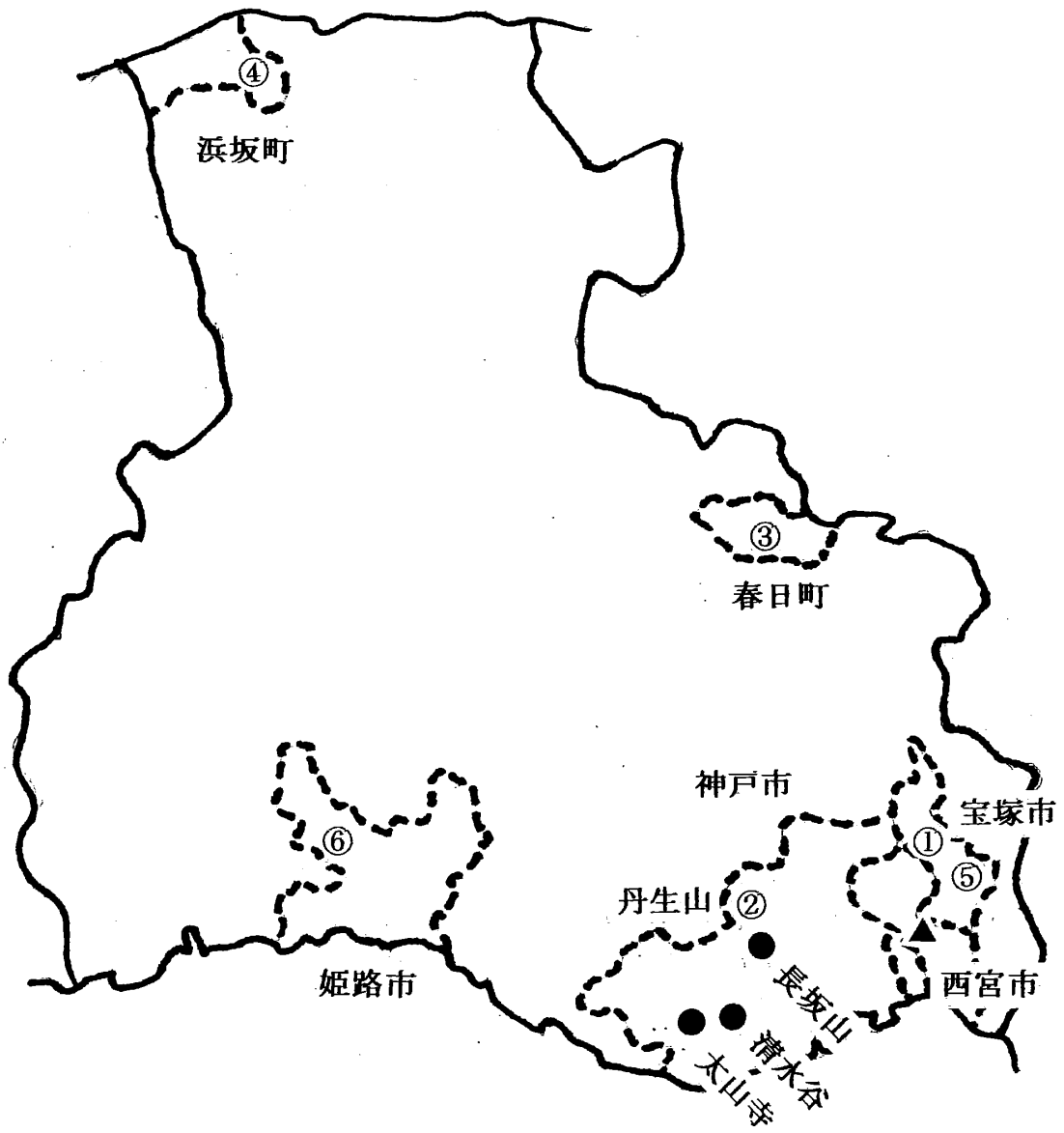
1♀a, 1980.8.8, 西宮市北山公園, 摂津地域初.

(注) 兵庫県内からは上記3種の他にアカイロトリノフンダマシを加えた計4種のトリノフンダマシ類とサカグチトリノフンダマシが報告されている.

年月日	産地	標高	東経	北緯	メッシュコード*
(大崎氏の採集データ)					
1995.5.13	神戸市西区伊川谷町前開 太山寺	220m	135° 04'00"	34° 41'00"	5235-00-35
1995.6.25	宝塚市切畑 JR福知山線旧線跡①	170m	135° 19'00"	34° 51'00"	5235-22-25
1996.7.25	神戸市須磨区白川, 清水ヶ谷	80m	135° 06'00"	34° 41'30"	5235-00-48
1996.7.25	神戸市北区山田町坂本 丹生山登山道②	350 -450m	135° 06'45"	34° 46'00"	5235-10-29
1996.7.25	神戸市北区山田町原野, 長坂山	300m	135° 07'30"	34° 44'00"	5235-01-80
(清水の採集データ)					
1980.8.8	西宮市北山町, 北山公園	190m	135° 19'00"	34° 45'30"	5235-12-15

表1. 産地のデータ(経度は15秒単位, 緯度は30秒単位)

大崎さんは「西宮貝類談話会」の会員である。この会の会員の多くは「西宮自然保護協会」にも所属している関係上、観察会等で御一緒する。微小な陸貝を採集する際には落葉をふるって丹念に探すために一緒に土壌生クモが見つかることがある。これまでに大崎さんやその他の会員からいただいた標本は相当数にのぼる。これらについては改めて報告したい。



姫路科学館で「クモ展」開催

船曳和代

6月26日から7月18日まで、姫路科学館で「クモ展～身近な動物・小さな芸術家」というタイトルの展示会が開かれています。

クモ展では、クモの生活やクモが作る芸術的な網、風変わりなクモ、珍しいクモをパネル展示や標本で紹介するとともに、ちょっとおしゃれなクモグッズ、ユニークなクモの形態デザイン画も展示しています。人との関わりのなかで、クモ合戦のビデオやクモの短歌・俳句の紹介もしています。また、郷土の生んだ博物学者・大上宇一先生のクモの研究についても紹介しています。

クモをこのような形で展示するのは全国的にも非常に珍しい試みではないかと思えます。とかくクモは嫌われがちですが、この展示を見て下されば、クモとは人間の役に立っているだなぁ、面白いものだなあと、マイナスイメージがプラスに変わるものと確信しています。

皆さんの周りの方々にも宣伝して下さい。そして、ぜひ見に来て下さい。

クモ展見学ドライブ紀行

須賀瑛文

6月27日。昨夜の天気予報によれば、沖縄と北海道を除いて、全国的に雨とのこと。目覚めると雨の音、予感は的中。

午前7時30分、篠突く雨の中を車で出発する。小牧インターから名神にはいると、雨胃はやや小康状態、と思いきや、関ヶ原が近づくとつれて叩きつけるような雨に変わる。もちろん道路は50キロ規制、50キロでも怖い。大津SAに入り小休止。ここで妻と運転を交代。とたんにあの一寸先も見えなかった豪雨が小雨に、そしてなんと大阪に近づくとつれ、雲間から日が射し始めるから不思議である(俺が雨男だったのか?)。おかげで、上り線、下り線でそれぞれ1件ずつの事故車を横目で眺めながらも、11時37分、姫路西インター着。姫路バイパスに入り、11時45分、太子東ランプを出て若干迷いつつも、それでも12時15分、薄日の射す姫路科学館駐車場に無事到着した。

クモ展の会場にはいる。入ってびっくりしたことは、まず、想像していたよりも会場が広く、展示物も多いことである。VTR 放映コーナーもある。さらに、

見学者が多く、親子連れが目立ったことである。会場が活気にあふれている。生きた展覧会というのが、会場に入ったときの第一印象であった。「これがコガネグモよ！〇〇ちゃん」「これ、うちにいるクモ、〇〇グモだね、お母さん」「ママ、見て、このクモの巣きれいね」「パパ、あそこ、テレビ！クモ合戦」。そんな会話があちこちで聞こえるのもうれしい。名古屋や岐阜でこんな展示会やったら、これだけ多くの見学者（それも楽しそうな）が来てくれるだろうか。

それにしても展示品の数が多い。今回は船曳和代さんの「網の標本」の展示が中心で、後は付け足し、と思っていたのだが、なんのなんの「クモの生物学と民俗学入門」といった感じである。クモの食わず嫌いの人でも楽しむことができるようにと、とてもうまく構成されている。ちなみに、正式なサブタイトルは、「身近な動物・小さな芸術家」である。

入口には、船曳さんの妹さんの策だという、とてもかわいらしいコガネグモのぬいぐるみ（ほしーい！商品になるほどの良い出来映え）が見学者を出迎えてくれる。会場に入るとすぐ、船曳さんのアイデアの「クモクイズ」コーナーがあり、子供たちの興味関心を一段と盛り上げる工夫がされている。抽選に当たると、船曳さん特性の網の標本が貰えるという。

まず、かんじんの船曳さんの網を見学。相変わらず素晴らしい出来である。今回は、「網の標本」に生態写真（緒方清人氏撮影）とアルコール漬け標本の三点セットで展示がなされていて、クモを知らない人でもよく分かる工夫がなされていた。新しい試みとして、ジグモの住居やハツリグモの網に木の葉を加えたものなど、なるほどと感心した。

小澤実樹氏のアートは何回見ても素晴らしい。やはり、餅は餅屋、専門家の作品である。しかし、専門家といえどもクモだけをテーマにこれだけの作品を描ける芸術家は小澤氏の他にはいないだろう。落語家桂あやめさんのクモグッズも面白かった。肌に直接着ける、いわゆる肌着（下半身用のものもあった）まで、クモをデザインしたものがあるということが分かり、クモグッズ収集者の一人として大変参考になった。

文学面からも、クモを詠んだ和歌・俳句がたくさん集められて展示がなされているのには感心した。仮死の蜘蛛こらえ切れずに歩き出す（右城暮石）、古壁の隅に動かずはらみ蜘蛛（正岡子規）などはクモの生態をよく表していて面白い。

何回も何回も会場を回ったが、見落とししたものも多かったに違いない。それほど展示物が多いのである。

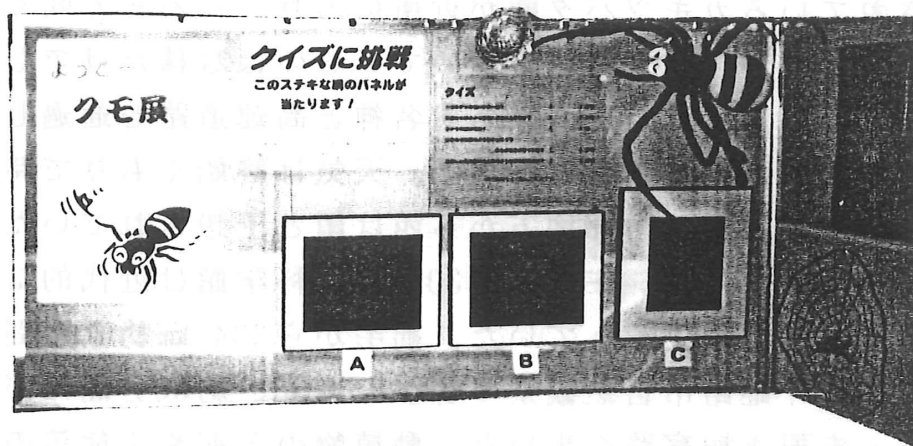
さて、今回の展示に際しては、小澤実樹氏、斎藤慎一郎氏、緒方清人氏、榊元智子氏、桂あやめ氏、清水裕行氏ほか多くの人々の協力を得たという。多くの人々の協力を得、さらに会場に並びきれないほどの展示物が集まって、うれしい悲鳴

を上げたというから、これはひとえに「船曳さんのお人柄、人徳」のしからしめる所以であろう。こんなことを考えながら、お土産の「クモ展 展示解説」(48ページからなるこの解説には、清水裕行氏の姫路市産のクモ目録のほかたくさんの内容が盛り込まれている)を手にして会場をあとにした。

会場を出ると、梅雨というのに熱い日差しが照りつけていて、車の中はまるで蒸し風呂。それでも来るときの豪雨に比べて、晴天ならばルンルンドライブ。国道9号線を北上、1泊3200円(食事別、老人料金、一般は3500円だそうな)の湯村温泉・栃の実温泉荘に宿泊。素晴らしい温泉に旅?の疲れを癒す。

翌28日も快晴。但馬高植物園にて、桂の巨木の下から湧き出るおいしい水を飲み、コケの中に生育しているヒョウノセンカタバミ(すぐ近くにある氷ノ山の名が付いている。ちなみにこの山は別名須賀の山という)などを眺め、清い流水の中に生育するバイカモを愛でながら午前中のひとときを遊ぶ。その後、出石(いずし)町まで直行、念願の皿そば(850円)を2人前(10皿平らげた後、国道9号、舞鶴自動車道、名神高速経由で17時に帰宅。楽しかったクモ展見学の旅も終了。

最後に、素晴らしい「クモ展」を企画された船曳さんと姫路科学館に敬意を表します。



素晴らしきクモ展

緒方清人

4月18日の夜、船曳さんからお電話をいただきました。受話器を切ると同時に、今度は吉田先生からでした。その内容を一口で説明しますと「姫路市科学館でクモ展を企画したので、生態写真を協力してほしい」とのことでした。船曳さんの巣網のパネルは、去年の立命館大学での学会で展示され、どれも見事な芸術作品に圧倒されました。今も強烈に印象に残っているので「私の写真がお役に立てれば嬉しい」と、即承諾しました。電話を切った後も余韻は残り「クモ展、それも科学館で、学会始まって以来か……」などと、何回も呟くと同時に「関西ではとんでもない事が始まっているぞっ」と、心の中で叫びました。

その後、船曳さんと数回手紙をやり取りし、写真の一覧表を見てもまたまた驚きました。なんと、種類が70種以上あるのです。29日には写真の件で家永館長と船曳さんが、わざわざ知立くんだりまで来宅。なんとか目録の写真をすべてお渡しすることができました。知立市はこれといって自慢するような名勝もなく、丁度、市の花（県花でもある）に指定されているカキツバタ園が近所があり、そろそろ咲く時期なので案内しましたが、残念ながら咲いているのは数株だけでした。

6月26日の梅雨の真ただ中、東名・名神と高速道路を通過し、いよいよ山陽自動車道の姫路西I.Cを出る。天気は終始くもりで時々晴れ間もでた。天気予報では中部地方から西は雨と予想されていたので、以外な天気に嬉しくなった。午後1時30分着、科学館は近代的な建物で、自然に囲まれた中に位置していた。拙宅から334 km約6時間の旅であった。近くに「姫路市自然観察の森」もあり、約30分間だがネイチャーセンターを覗き観察路を歩いた。動植物の名前や生態等の看板や名札も多く一般の人にも理解しやすく、「自然を見る眼」を押し付けではなく、楽しみながら探索できるようにいろいろと考えてあった。路上にヒラタクワガタ♂の死骸を拾ったり、タブにホシベニカミキリの雌が樹幹をかじっていたり、イタチグモ♀とコシロカネグモ♂にレンズを向けたりした。時間さえあれば一日つぶしたいと思った。

科学館の正面玄関を入ると、「クモ展」の大きな看板を見上げた。わくわくしながら展示室に入った。早速、船曳さんとお会いする。色々と苦労話しを楽しくお聞きし、初日の会場はたくさんの人で賑わっていた。まず、左手の通路両面には小澤先生の大型パネル画が展示され、突き当たりに桂あやめさんの着物や衣類がガラスケースに展示されている。下着にもクモが大きくデザインされドキリとした。正面には須賀先生のグッズや出版物関係、その裏側には郷土の博物学者のコーナー、明治時代の大上宇市氏の生き方に驚嘆する。背面と左隅には斎藤さんがクモ合戦を主体とする民俗関係、そのビデオも放映されている。そして、会場の約3分の2が船曳さんを主体とする網のパネル。その多さに圧倒される。それも、つい立ての位置を円網の横糸のように配置するという手の込んだものだ。一枚の網のパネルにはセットで説明文・生態写真・標本と完璧までにまとめてあった。そこには加村先生や吉田先生や栞元さんや多くの関西蜘蛛研究会のご協力があったことと察する。そして、なによりも「クモ展」を企画された姫路市科学館の家永館長、管理指導主事の斎藤さんを始め、多くの関係者の方々に心よりお礼を述べたい。

この記念すべき「クモ展」が第1歩となり、第2・第3と更に充実し、受け継がれることを願いたい。しおり糸のように……。



「クモ展」の会場入り口

クモ展を訪れた仲間たち

八幡明彦（東京）

姫路で「クモ展」が開かれる、とのチラシを吉田真さんにいただいて、ずうずうしくもコーディネートの船曳さんに「わたしも出品させて」と持ち掛けました。昨年、学会にもお持ちした「巨大ぬいぐるみ・クモ」（今回はイワガネグモ）や、絵本などを紹介しようということで、無理をお願いしましたが、快く承諾していただきました。

わたしはタランチュラを飼ったり、インターネット上でクモに関するホームページを開いている関係で、変わった生き物を飼育している友人が多くなりました。彼らに「クモ展」のことをインターネット上で紹介すると、関心が集まりました。

ある人は、クモ嫌いだが興味あり、ある人は「タランチュラの生体も出るの？」と期待するという具合。そこで「自然環境のよいらしい開催場所の姫路科学館の周辺でクモ観察も行なう」と銘打って、友人たちを集め、展示会初日に訪れることに。

クモ嫌いの友人は、リクガメなどを飼っている大阪の女性。姫路でカメの産卵を見る会が開催される前日とかいうことで、何人かの友人を誘って来てくださいました。おそろおそろ会場にはいるも、そこらじゅうにクモが放し飼いでウロウロしているわけで

はなく、一安心した様子。（彼女らがわたしのうちでの飼育状況から受ける印象は、そういう「ジュラシックパーク」のようなものらしいです。）網の標本は、クモ嫌いの彼女らの注意を十分ひきつけ、興味深く見入っておられました。

やはりクモが苦手だが、「アシダカグモはゴキブリをとる益虫」というわたしの説得（？）にその点だけ改心してくれたといういきさつのある、大阪の夫婦は、最近大阪南部に引っ越したので、セアカゴケグモが恐ろしくて仕方ないらしく、実物を見て、「なんや、小さいやん」と一言。液侵標本では色が出ていないのが残念。やはり、生体展示がいいですね。（管理上の都合もあるでしょうが。。）

実は私は、自宅で50種を越すタランチュラと、他にも多くの国産クモを飼っており、繁殖などもさせているので、「生体の展示」はいろいろと考えてみることはあります。「クモ生態展示館」のようなものをつくるのが生涯の夢。やはり容易なのは、タランチュラのなかでは南北米産の徘徊性のもの。糸をさほど張らず、穴を掘らず、大人しいので、展示向きです。タランチュラの生態

は実は多様で、地中にもぐりっぱなしの地中性のアジア産グループや、樹上生活する熱帯林のもの、糸をシートやトンネル状にはりめぐらすアフリカ産のグループなど、いろいろです。国産クモは、部屋に放し飼いなどにしていますが、やはり円網を作る造網性クモは、きれいな巣をはらせるのは大きなスペースがいます。セアカゴケグモなどのヒメグモ科は、巣を容易に張ってくれるし、展示には向いているでしょう。

ゴケグモの横には、タランチュラの標本二体が展示。同定を頼まれましたが、二種とも南米産のオオツチグモ科 (Theraphosidae) の徘徊性種という推測まで。この日来ていた友人には、フェレットなどの哺乳類から、ムクドリ、外国産の蛇、トカゲ、カエル、そしてタランチュラを飼っているという、自称「げても館」の夫婦も来ておられました。デザイン関係のお仕事でもあり、クモ・デザインのほうにも随分興味をもたれたようです。

さて、展示を見たあと、外に出て、館の周辺を散策。クモを探します。カメに興味のある人はさっそく池のなかにいたミドリガメを発見。そしてなんと、池のはたに、シマヘビの黒変個体であるカラスヘビ。蛇飼いでもある友人が「あれは！」と声を上げると、わたしは一気に駆け下り、素手でヘビを捕獲。1.5 mくらいあるりっぱな個体でした。誰ともなく「天然記念物じゃない？」ということになり、リリースしましたが、そうでなければ「ぜったい飼いたい」という連中揃い。後に調べてみると国・兵庫県・姫路市のいずれも記念物指定はしていなかったようです。館の方に向かうと、このあたりではヤマカガシも黒変個体がいるとか。

午前中は晴れていたのですが、この頃には薄曇りになってしまって、肝心のクモは、あまり色んな種類には出会えずでした。わたし自身は、朝、夜行バスで姫路に来たので、朝のうちに近くの書写山に登ってみました。山道に雨あがりに造網するクモたちがみつきり、とくにヤマジグモが複雑な巣をシダの間に作っているのが見られました。

科学館を出て、夕食を一緒にする間も、クモやら蛇の話しで持ちきり。いつでもそうなのですが、ファミリーレストランの一角で異様な会話に花をさかせる集団でした。

その後も、インターネットホームページで「クモ展」の宣伝を続けたので、それを見てクモ展に行ってきた方もほかにも何人かおられたようです。みんな、「クイズ」に応募したようで、網の標本が当たるのを楽しみにしています。

なお、私事ですが、ホームページに出入りする人たちを中心にやり始めたのですが、タランチュラとその他のクモに関して「飼育」をメインテーマにした

個人誌を発刊しました。よろしかったら、ご覧ください。

『土蜘蛛通信』創刊号 12 ページ (年間6号予定)

発行人 (ペンネーム) : 海松櫃 知朱 (みるかし ちあき)

申込先 : 東京都荒川区南千住 6-37-9-2601 八幡 (Fax. 03-5604-6933)

電子メール : hime@mirukashi.com

ホームページ : <http://www.mirukashi.com>

「土蜘蛛みるかし姫のクモニスト・インターナショナル」



緒方清人氏撮影

会場内はたくさんの人で賑わっていた

1999.6.26

ヒトエグモ (*Plator nipponicus*) についての覚え書き

吉田 真

はじめに

ヒトエグモは奇妙なクモである。1970年頃、京都・東福寺の末寺に下宿していたとき、私は初めてこのクモに出会った。私の田舎（山形県米沢市）では豆を木槌でつぶし味噌汁の具にしているが、このクモは大きさ・形・色のどれをとっても、その「打ち豆」にそっくりである。丸くて薄っぺらく、うす黄色の身体の両脇にカニのような足がついている。あまりの奇妙さに、こいつ背中を下にしても歩くんじゃないかと思い、逆さにしてみた。ヒトエグモは不快そうに起き直って歩き出した。当たり前である。昼と昼の間に潜り込もうとしたので、慌てて採集した覚えがある。

奇妙なのは姿形だけではない。八木沼（1986）によると、このクモの分布は京都・大阪・奈良となっており、他の都道府県では採集されていない。一体どうしてこんな変な分布をしているのかと以前から思っていたが、それ以上調べてはみなかった。しかし、前号の「くものいと」で、京都市在住の牧野達也さんが魚礁ならぬ蜘蛛礁を作り、ヒトエグモをざくざくと捕獲することを夢見た計画を実行した（牧野，1999）ことを知り、私のなかでヒトエグモに対する関心がにわかに沸き上がってきた。

そこで私はヒトエグモに関する文献を集め研究の歴史をまとめるとともに、おもに近畿在住のクモ研究者に問い合わせヒトエグモの採集記録を整理し、「くものいと」に掲載することにした。この「覚え書き」を契機として、ヒトエグモに関する研究が進むことを切に願っている。

この文章をまとめるに当たって、多くの方々の協力を得た。須賀瑛文さんと加村隆英さんには文献を送っていただき、笹岡文雄さんには文献の所在場所を教えていただいた。立命館大学留学生の申東九さんにはハンブル語の文献を日本語に訳していただいた。澤本富子さんにはヒトエグモを採集していただいた。加村隆英さん、田中穂積さん、金野晋さんには採集記録を教えていただいた。ここに深い感謝の意を表す。

研究の歴史

ヒトエグモ科 (Platoridae) は、極端に扁平な身体と横歩きの脚によって特徴づけられたアジアと南アメリカの小グループに対して、Simon (1880) によって新設された科であり、南アメリカの *Vectius* と *Doliomalus*, 中国とイン

ドの *Plator* および日本の *Hitoegumoa* の4つの属を含むとされてきた (Platnick 1976)。

日本のヒトエグモは岸田 (1914) によって *Hitoegumoa nipponica* という学名で記載された。彼は前疣が他の糸疣より明らかに大きいとの理由から、ヒトエグモを *Plator* とせず、*Hitoegumoa* とした。しかし Platnick (1976) は、そのような違いはないとして、*Hitoegumoa* を *Plator* のシノニムとし、ヒトエグモを *Plator nipponicus* とした。彼はこの属に、中国北部の *Plator insolens*, 中国南部の *P. pennatus*, 日本の *P. nipponicus*, それにインドの数種が含まれると述べている。

その後 Paik (1978) によってヒトエグモ (*Plator nipponicus*) が韓国の各地にも分布することが分かり、これによってヒトエグモは日本の固有種ではないということが明らかになった。

ヒトエグモの採集・発見の記録

京都：

1) 岸田久吉：明治 44 年の夏，京都の人家で夜間熟睡している小生の顔をはい回って目覚ましたために採集せられた十個ばかりの標本を基本とする。メスも捕れているが，成熟しているのはオスだけである (岸田 1914：原文のまま)，2) 吉田真 (1970 頃)：京都市東山区の東福寺の末寺で2メス採集。畳の上を歩いていた，3) 吉田真 (1975 頃)：京都市左京区の自宅で採集。畳の上を歩いていた，4) 澤本富子 (1993)：京都市左京区の自宅で1メス採集，5) 加村隆英 (人からもらったもの)：京都市北区小山堀池町 (1980.5.17 1オス)，京都市左京区 (1983.5.10 1メス)，京都市内 (1984年3月下旬 1オス)，6) 金野晋 (1980年代)：京都市左京区にある下鴨神社の額の上にあった，7) 牧野達也 (1994.4.25)：京都市東山区の民家 (クモ屋敷) 前。花台ブロックの穴の中で採集。幼体，8) 牧野達也 (1994.4.25)：京都市東山区の民家 (クモ屋敷)。1階の散らかった荷物の下で採集。幼体，9) 牧野達也 (1994.7)：京都市東山区の民家 (クモ屋敷)。1階で掃除機に吸い込む。幼体，10) 牧野達也 (1996)：京都市東山区の民家 (クモ屋敷)。2階座布団の上で採集。メス成体，11) 牧野達也 (1997.6)：京都市東山区。民家 (クモ屋敷) 近くの地蔵さんの祠の壁で発見。幼体，12) 牧野達也 (1997.12.14)：京都市東山区。民家 (クモ屋敷) 前のブロックの穴の中で採集。幼体，13) 牧野達也 (1997.12.28)：京都市東山区。民家 (クモ屋敷) 近くの地蔵さんの祠の壁で採集。幼体。牧野の記録はいずれも牧野 (1999) による。

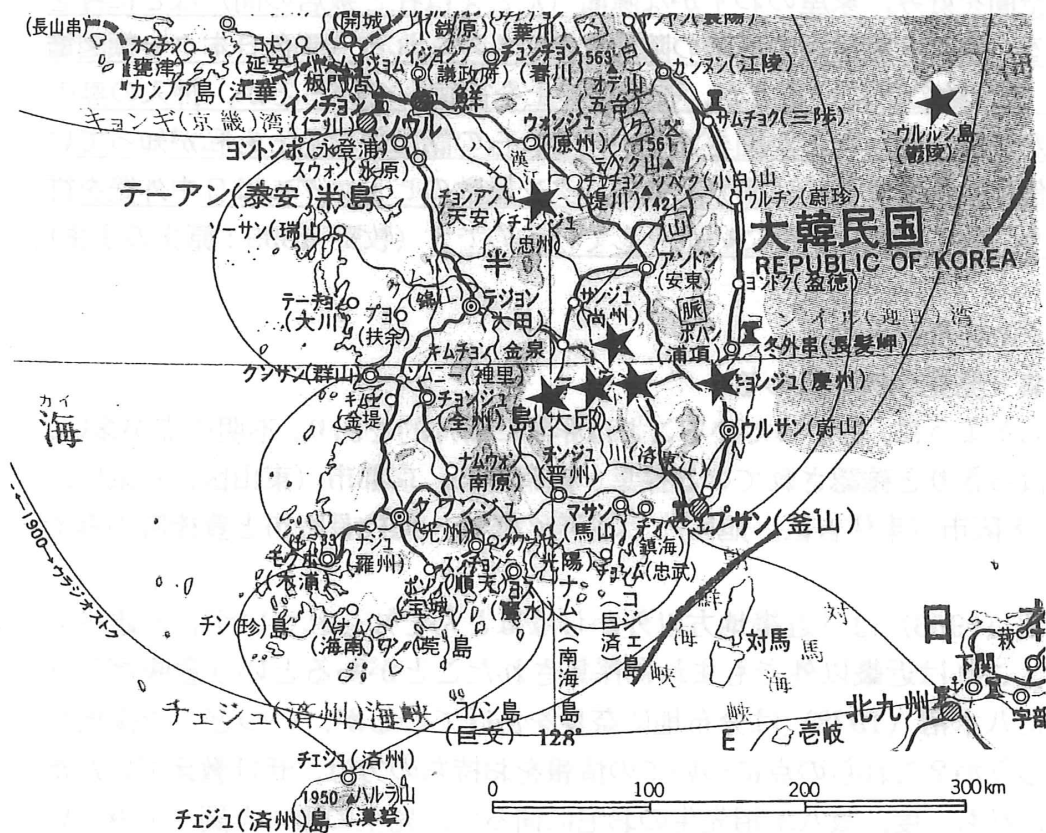
大阪：

1) 八木沼健夫：大阪市東住吉区の農家・堺市内で何度か採集したが，最近追手門学院高校中川貴氏により旭区の人家から成♀数頭が採集され筆者を喜ばせた（八木沼 1958：原文のまま），2) 加村隆英（1995.10.1）：大阪府豊能郡豊能町吉川。民家（空き家）のガラス窓の内側にいるのを目撃。1メス，3) 田中穂積（1970.4.6）：大阪府河内長野市天野山金剛寺で採集。1オス。

なお八木沼は他にも，いくつかの文献でヒトエグモの採集地について述べている。近畿地方以外からはほとんど知られていず，とくに大阪で多く見つかっている（八木沼 1966：原文のまま）。分布：本州（京都・大阪・堺）（八木沼 1978：原文のまま）。分布：本州（京都・大阪・奈良）。大阪市内の寺院や旧家でもっとも多く発見されている（八木沼 1986：原文のまま）。

韓国：

Paik (1978) によれば，韓国では，Chugju (忠州)，Hyopchon (峽川)，Taegu (大邱)，Kyongju (慶州)，PyoChungSa (寺，場所不明)，WhaUmSa (寺，伽椰山の近く)，Chonpudong (天府洞。鬱陵島) で採集されている。地図参照。



韓国におけるヒトエグモの分布 (★)

生息場所について

採集・発見の記録でも生息場所についてふれているものは上述したが、それ以外に八木沼（1966, 1978）、Paik（1978）および牧野（1999）が生息場所について触れているので、ここに記しておく。

柱と敷居の間などに潜んでいることが多いが、新しい家ではみられない（八木沼 1966：原文のまま）。狭い隙間を好み、石垣の間、家屋のわずかの隙間などに身をひそめる。大体において屋内性のクモであるが墓地の石碑の石の隙間などにもみられる（八木沼 1978：原文のまま）。積み重ねている瓦の間か、その他の隙間に身をひそめて住む（Paik 1978：原文のまま）。

これらの発見はいずれも日中でした。この内の約半分が戸外で、しかもそれらは似通った状況で発見されています。なかでも家の前のブロックの穴からは年月を経て二度も発見されています。さらにこの二例の発見状況は全く同じでした。ブロックの穴の中の様子は土や枯れ葉など物体は何も入っておらず、とくに狭い空間になっているわけではありませんでした。その発見された状況は図鑑や人の話から抱いていたイメージとは違いました。ヒトエグモの生息場所＝狭い空間を好み、家屋のわずかな隙間（たとえば柱と敷居の間）などに身をひそめる。また人家付近の石碑の隙間などにもみられる（原色日本クモ類図鑑より）。植木鉢の下にいたりとか、夜中畳の上を徘徊しているとか、押入の奥の箱の中から見つかったとか聞きますが、これらの話は少なくとも私が知っている発見例にはあまり当てはまりません。クモ屋敷のヒトエグモは日中外壁を徘徊したり、狭くもない空間にいたりしているのです（牧野 1999：原文のまま）。

ヒトエグモ研究の方向

1) 採集・発見の例を集める

上述したように、分かっていることは非常に断片的であり、不明の点が多い。日本ではっきりと確認されている採集・観察地は、京都市（東山区、左京区、北区）、大阪市（東住吉区、旭区）、大阪府の堺市・河内長野市と豊能町のみである。

八木沼（1966）は「近畿地方以外からはほとんど知られていず」と述べているが、これは近畿以外でもまれに採集されたことがあるという意味だろうか？また八木沼（1978）は分布地に奈良をあげているが、いつどこで採集したのだろうか？これらの点についての情報をお持ちの方は、ぜひ教えていただきたい。私も一度、故八木沼先生のお宅に伺って、先生の標本を調べてみたいと思っている。それ以外にも、西川さんをはじめとする関西在住のクモ研究者でヒトエグモを採集された方々がここにあげた以外にもおられるはずであり、

情報の提供をお願いしたい。

ヒトエグモが韓国にも分布しているということ、私は迂闊にも今回初めて知ったのだが、八木沼先生の図鑑に書かれていないということは、先生も生前このことを知らなかったのだろうか（そんな馬鹿な!）？韓国については、他の文献に載っていないかを調べ、韓国の研究者にも問い合わせをする必要があるだろう。

2) 採集する

新たに採集することも重要であるが、ねらって採れるようなクモではなさそう。しかし、Paik (1978) が瓦の下から採集したらしいことは、我々にとって盲点であり、日本でも探してみる必要があるだろう。

捕食行動を含め、このクモの生活史についてはほとんど何も分かっておらず、生きたまま採集した方は、飼育によって捕食行動、配偶行動、産卵などを観察していただきたい。

3) ヒトエグモはどこから来たか？

上述のように、日本で確実に分布しているのは京都市と大阪府（大阪市、堺市、河内長野市、豊能町）である。これに対して韓国では、大邱を中心とした東西 150km、南北数十 km の範囲に分布地（5 地点）が集中してはいるが、それより 200km ほど北の忠州や数百 km 北東に位置する鬱陵島など、地理的にかなり離れた地域でも採集されている。これは何を意味しているのだろうか？

可能性としては、①ヒトエグモは昔から韓国と日本に分布していた、②ヒトエグモは元来、韓国に分布していたが、その後日本にも移入した、③ヒトエグモは元来、日本に分布していたが、その後韓国にも移入した、の3つのケースが考えられる。これらのうち、どれが可能性が高いだろうか？

ここで問題になるのは、日本での分布の狭さと韓国での分布の広さである。もし①や③なら、九州や中国地方など、日本の他の地方でなぜ採集されていないのだろうか？むしろ、韓国での分布の広さから判断すると、韓国の方が本来の分布地であり、根拠薄弱できちんとした論議はできないが、②が一番可能性が高い感じがする。さらに言えば、日本のものが韓国から人為的にもたらされたという可能性はないだろうか？韓国と日本は昔から交流が深かったのであるから、そういうことは十分考えられる。

日本と韓国のヒトエグモの DNA を分析し、両者の分岐年代が推定できれば、問題はもっとはっきりするかも知れない。分岐年代が非常に古ければ、人為分布の可能性は捨象されるかも知れず、反対に非常に新しければ、人為分布の可能性が高まるであろう。

引用文献

- 加村隆英. 1996. 妙見山付近のクモ目録. くものいと, 20: 1-6.
- 岸田久吉. 1914. 科学世界 8(1): 44-45.
- 牧野達也. 1999. 蜘蛛礁計画. くものいと, 25: 12-20.
- Paik, K. Y. 1978. Illustrated Flora and Fauna of Korea. Vol. 21 Araneae: 408-410. (ハン グル語で書かれている)
- Platnick, N. I. 1976. Notes on East Asian *Plator* (Araneae, Gnaphosoidea). *Acta arachnol.*, 27(1): 1-7.
- Simon, E. 1880. Arachnides recueillis aux environs de Pekin. *Ann. Soc. Ent. France*, ser. 5, 10: 97-128. (直接参照していない)
- 八木沼健夫. 1958. 大阪の自然 (動物Ⅲ, クモ) . *Nature Study*, 4(2): 12.
- 八木沼健夫. 1978. 原色日本蜘蛛類大図鑑. 増補改訂版. 保育社. 206pp.
- 八木沼健夫. 1966. 家のクモ. 大阪の自然: 44-49. 大阪六月社.
- 八木沼健夫. 1986. 原色日本クモ類図鑑. 保育社. 305pp.

編集後記

編集係の独断で、26号は兵庫県特集とし、兵庫県在住の方々や「クモ展」を見に来られた他府県の方々に原稿を依頼しました。発行は例によって期限（6月30日）より遅れましたが、何とか発行できてほっとしています。執筆していただいた方々、本当に有り難うございました。執筆者の緒方さんと八幡さんは、この機会に関西クモ研究会に入会するとのこと。編集係としてはうれしい限りです。

ところで、どなたか編集を手伝っていただける方はおられませんか？白状しますと、学会の庶務幹事をやりながら「くものいと」の編集をやるのは、なかなか大変です。それに加えて今回は、学会広島大会の開催事務局をやることになってしまい、てんてこ舞いでした。やっていただける方は、吉田までお申し出下さい。（Y）

行事予定

9月19日に姫路で採集会を行う。当日11時に姫路科学館ロビー集合（3月の案内を参照して下さい）。また、12月12日（日）に四天王寺高等学校で例会を行う。

〈関西クモ研究会〉

会長 山野忠清

編集 吉田 真

庶務 加村隆英

会計 牧野達也

顧問 西川喜朗

くものいと 26号

発行年月日	1999年7月13日
発行者	関西クモ研究会 (代表 山野忠清)
住所	〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15 追手門学院大学 生物学研究室内 TEL 0726-43-5421 (内線5113 西川研, 内線5106 加村研)